

第2回鳥の勉強会



黒田弘章 撮影

2014年1月29日 19:00-21:05

北海道海鳥センター

主催：北海道海鳥センター

はじめに

2014年に行われ好評だった海鳥センター鳥の勉強会 2015年に第2回として開催することになりました。この年も前年と同様にバードリサーチの方2名に加え、偶然羽幌に訪れるバードライフ・インターナショナルの方と野鳥の会の方それぞれ1名の合計4名が発表します。

1 題目は冬に羽幌にも渡ってくるオオワシのロシアの繁殖地の話です。2 題目は羽幌では冬鳥で嘴が交差しているのが特徴のイスカの話です。3 題目と4 題目は海鳥の混獲の話で、海鳥が漁網に絡まって死ぬ（混獲）の話と、海鳥繁殖地として重要な天売島の周辺海域の海鳥の重要生息地の選定事業の紹介です。発表者の方々は鳥類に関して第1線で活躍されています。わかりやくす発表してくれるので鳥類についてそれほど興味のない方でも楽しめる内容です。



イスカ

プログラム

19:00-19:05 開会 演者紹介

19:05-19:30 繁殖地ロシアのオオワシの生態
植田睦之 (バードリサーチ)

19:35-20:00 マツとともに生きるイスカ
三上かつら (バードリサーチ)

20:05-20:30 海鳥の保全にむけて：混獲問題
佐藤真弓
(バードライフ・インターナショナル)

20:35-21:00 海域を対象とした野鳥の重要生息地
(マリーン IBA) 選定事業の紹介
山本裕 (日本野鳥の会)

-21:05 閉会

発表要旨



ハシジロアビ

繁殖地ロシアのオオワシの生態

植田睦之（バードリサーチ）

2008年6月から8月の3か月間。オオワシの繁殖地のアムール川下流域でオオワシの繁殖成績の調査をしました。ボートで川を走り、ワシの巣を探し、繁殖の成否と巣立ちヒナ数を調べる調査です。

オオワシの巣は、アムール川の本流にはなく、すこし湿地の中に入ったところにある池や水路のわきの大木につくられていました。オオワシが水辺のすぐそばを占拠しているためか、オジロワシの巣は水辺からやや離れた林の中にあり、ミサゴはさらに離れた場所とすみ分けているようでした。

オオワシの食物は、ほぼ100%魚でした。7月中下旬にはカラフトマスやサケが遡上をはじめ、食物が豊富になるので、それまでの食物の確保が繁殖成績に効くようです。その間、ワシはフナやコイ、カワカマスなどを食べていますが、水位の高低により魚の獲りやすさが変わり、繁殖成績の高低につながるようです。ヒナは1-2羽が多いですが、3羽、稀には4羽の巣もありました。

調査中はキャンプ生活ですが、大変なのは、ダニ、蚊、ブユ、アブといった虫たちです。特にダニはかなり危険で、数匹に1匹の割合で持っている脳炎にかかると死亡する危険もあるそうで、調査を終わると裸になって、ダニがついていないかどうか確認します。蚊やブユは痒いだけではありますが、でも、嫌なものです。どうもロシア人よりも日本人を好むようで、ぼくに集中してきます。彼らの、あの強烈な体臭は防虫のための適応的な形質なのかもしれません。逆にアブはロシア人が好きなようです。

最後にちょっと宣伝とお願いです。

2016年から2020年まで、5年間かけて、日本の鳥の分布を調べる

「全国鳥類繁殖分布調査」を行ないます。過去2回（1970年代と1990年代）は環境省の事業としてやってきましたが、緊縮財政のおり、調査の実施が難しくなっていました。

そこで、NGOと環境省の共同調査として実施する予定です。みんなで日本の鳥の今を明らかにしませんか？

以下より調査員登録をぜひお願いします

<http://www.bird-research.jp/1/bunpu/>

バードリサーチ



マツとともに生きるイスカ

三上かつら（バードリサーチ）

鳥の図鑑をパラパラとめくっていると、様々な鳥が様々な形や色を持っていることに気づかされます。ヘラシギの嘴やソリハシセイタカシギの嘴の形など、面白いなあ、不思議だなあ、と思われる方も多いでしょう。今回の話題はイスカ *Loxia curvirostra*。「イスカの嘴（はし）の食い違い」という言葉がありますが、その名の通り、嘴が互い違いになったあの鳥です。

イスカは日本では主に冬に見ることができます。渡来は毎年ではなく、いわゆる「当たり年」があり、おもにより北方の地域で繁殖した個体が、餌条件などによって時折南の地域へと渡ってきます。では、繁殖地ではどんな生活をしているのでしょうか？今回は青森県にある繁殖個体群のイスカを観察して、わかってきたことを、少し、ご紹介したいと思います。

イスカの生活は、マツとともにあります。そもそも互い違いになった嘴は、マツぼっくりを効率的に開いて種を食べるために特殊化した、スペシャルな道具です。特殊化しているがゆえに、マツの種子が実るタイミングや量に合わせて、繁殖や換羽などの生活史サイクルが影響を受けている、と考えられます。

また、イスカの体の色についてもお話したいと考えています。

海鳥の保全にむけて：混獲問題

佐藤真弓（バードライフ・インターナショナル）

開発や環境の悪化で世界的に鳥の数が減っているが、中でも海鳥は深刻な状況である。約 350 種の海鳥のうち 90 種が IUCN（国際自然保護連合）により絶滅危惧種としてレッドデータブックに掲載されており、アホウドリ類においては 22 種のうち 15 種が絶滅危惧種である。海鳥が数を減らしている原因として、繁殖地の外来捕食者や海洋汚染、開発による繁殖地の消失など様々な理由が考えられるが、最大の脅威は漁業による混獲である。

混獲とは漁業において対象とする魚種以外の種が偶発的に捕獲されてしまうことで、毎年少なくとも 16 万羽の海鳥がはえ縄漁業で命を落としていると言われている。刺網（流し網を含む）による混獲は、これまであまり実態が知られていなかったが、最新の研究報告によると、毎年 40 万羽の海鳥が犠牲になっており、中でも北太平洋はバルト海と並んで最も被害が深刻な海域であることが明らかになった。極東ロシアの排他的経済水域内で行われているサケ・マス流し網漁業について混獲の実態を調査した研究報告によると、年間約 14 万羽が混獲されているという。このままでは、ロシアのカムチャッカから北海道にかけ、近い将来海鳥が姿を消してしまうことが懸念される。

一見、解決は難しそうであるが、少なくともはえ縄漁における海鳥の混獲問題は明るい兆しが見えてきたところである。はえ縄漁においては、混獲を防ぐための効果的な対策（混獲回避措置）が確立されており、また国際的なルール作りも進んでいる。こうした混獲回避措置を使うことで、混獲を限りなくゼロに近づけることが可能である。一方、刺網による混獲の被害は深刻だが、残念ながら効果的な混獲回避措置がない。漁業と共存できる新たな混獲回避措置の開発が早急に求められる。

海鳥の混獲の減少と生息環境の保全、そのためのネットワークづくりを目的として、バードライフ・インターナショナルは、1997 に海鳥保全チームを結成し、これまで混獲を回避する漁具の開発や、アホウドリ・タスクフォース（Albatross Task Force）による漁業者との共同の取り組み、漁船の監視員の派遣、各国政府や RFMO への保全の働きかけなど様々な活動を行ってきた。本セミナーでは、海鳥の混獲問題とともに、バードライフの取り組みについて紹介する。

海域を対象とした重要野鳥生息地（マリーン IBA） 選定事業の紹介－選定と保全への活用、課題

山本 裕*・葉山政治（日本野鳥の会）・佐藤真弓（バードライフ・インターナショナル）

IBA（Important Bird Area:重要野鳥生息地）は、鳥類を指標に「重要な自然環境」を選定し、それらを国際的なネットワークとして、持続的な保全や管理を進めていこうとするプログラムで、国際的な鳥類保護団体バードライフ・インターナショナル(BirdLife International: 以下、バードライフ)が、世界 100 か国以上の加盟団体と共同で実施しているプロジェクトである。日本では 2004 年に日本野鳥の会が 167 か所を選定し、優先的にその保全と保護指定の強化に取り組んでいる。マリーン IBA（Marine Important Bird Area：海の重要野鳥生息地）は、この IBA のコンセプトを海洋にまで広げたもので、海洋における食物連鎖の上位に位置する海鳥を指標に生物多様性の高い海域を選定し、海洋と海鳥双方の保全に貢献することを目的としている。本セミナーでは、日本のマリーン IBA の選定状況と課題について報告する。

日本野鳥の会とバードライフは、2010 年に、海鳥研究者とともに、マリーン IBA 選定についての情報の共有と意見交換を行なうワークショップを開催し、国内のマリーン IBA の選定を開始した。マリーン IBA の選定は、陸上の IBA と同様に、バードライフの定めた世界共通の 4 つの基準(A1: 世界的に絶滅の危機にある種が生息する、A2: 限定された地域に生息する種、または固有種が生息する、A3: あるバイオームに特徴的な種の相当数が生息する、A4: 多くの渡り鳥が利用／生息する)により行われる。

マリーン IBA のタイプは、海鳥の海域の利用方法により 4 タイプ(①繁殖コロニー周辺の採餌・行動利用海域、②非繁殖期の海鳥が利用する海岸や沿岸部、③渡りの隘路(マイグレーション・ボトルネック)、④外洋において海鳥が利用する海域)に分けられ、種ごとに選定基準を満たす沿岸域や海域があるかどうかを、コロニーや洋上での分布、採餌に利用する範囲(ボートセンサス、衛星追跡等によるトラッキングデータに基づく)、渡りの際に利用する海域のデータ等に基づき、地理情報システム(GIS)の地図を作り、最終的にそれらの複数の地図を統合して、海域を選定していくものである。国外では、スペイン、ポルトガル、インドなど 40 か国ですでに選定が終わっている。

日本では、ベニアジサシ、エリグロアジサシ、ウトウ、カンムリウミスズメなど 15 種の海鳥を指標に 49 ヶ所の海域を日本のマリーン IBA として 2012 年に選定し、暫定版として公表している(BirdLife 2012: マリーン・イーアトラス(Marine e-atlas))。このマリーン IBA は、環境省が進める「生物多様性の保全をするうえで重要度の高い海域」の抽出に使われるほか、洋上風力発電の建設計画の際に基礎資料として活用されることが検討されるなど、保全への活用に期待が高まっているが、日本ではまだ選定の根拠となる海鳥の情報(いつ、どの海域にどれくらい海鳥がいるか、採食範囲等)が不足しており、今後さらなる検討も必要である。

第2回鳥の勉強会
2014年1月29日発行

編集・発行

北海道海鳥センター
北海道苫前郡羽幌町北6条1丁目
0164-69-2080

